慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『労働』の新定義
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.4 (1911. 10) ,p.483(135)- 511(163)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19111020-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟行はれて雇主は勞働者の不要な時は遠慮なく之れを解雇し、且つ雇主と雇人との關係は全然權義的となりて何人も其義務以外の救濟を行はざるが爲めに、特に富豪の慈善行爲を必要としたる譯なれども、此の如きは我國の現狀に於ては或は充分ならんも、將來資本的經濟の發達と共に右の窮狀は益々甚だしかる可きが故に、此の如き任意的の慈善行爲は到底不充分なる事を證明するや必然なり故に近き將來に於て之れに代ゆるに强制的勞働保險を以てし、勞働者の獨立を維持すると共に、權利として救濟を請求せしむるの方法を講ず可きものなり。

『勞働』の新定義

高城仙次郎

一 緒論

經濟學者の用ふる『勞働』の定義には推理上不都合なるもの多し。例へばジェボンス氏の有名なる『勞働』の定義に曰く

Labour is any painful exertion of mind or body undergone partly or wholly with a view to future good. (Theory of Political Economy, Chap. V.)

此定義は仔細に之を解剖するに沒理的の分子を含めるを見る。氏は『勞働』を以て『未來の利益の爲になす心的若しくは身的の苦痛なる役勞(エキザーション)』となせど、總べて人の勞働は皆心的なると同時に身的也。(註一)言ふ迄もなく、或種の勞働は他の勞働よりも心的にして大腦の疲勞を釀すこと多し。例へば新聞紙の編輯員は新聞紙の配達夫よりも多大に大腦を勞さゞるを得ざる也。然れども如何なる器官の動作にしても筋肉の反動を惹起せざるもの一もなきと同時に任意の筋肉の動作にし

て大腦に起り、又は之に反動を與へざるもの一も無し。新聞紙の編輯員は記事、論說等を起草するに當り、大腦を勞すると同時に之を筆記する際には手指を勞するを要す。若し假りに之を口授すとなすも、猶ほ口、舌咽喉等を使用せざるを得ず。是れと同じく、配達夫も新聞紙を携帶して疾走する時に筋肉を勞すると同時に配達の順序、配達物の區別、顧客の住所等に關し常に意を用ゐざるを得ざる也。

次に、勞働を以て單に『役勞』とせずして『苦痛なる役勞』となす人ジェボンス氏のみに非ず。例へばロシエル氏は勞苦(Mühe)を以て勞働の特徵とせり。氏曰く

Zum Begriffe Arbeit gehört immer das Merkmal einer Mühe, die auf einen ausser ihrer selbst liegenden Zweck gerichtet ist. (Grundlagen der Nationalökonomie, 23 ste Aufl., S. 100.)

ワグネル氏も曰く

Arbeit (im wirtschaftlichen Sinne) ist ——eine als solcke oder als bloses Mittel zum Zweck der Ermöglichung der Bedürfnisbefriedigung mit Opfern (Pein, Last, Unannehmlichkeit, Kraft- und Zeitaufwand, insofern mit Opfern von "Leben") verbundene persönliche Anstrengung menschlicher Kräfte. (Grundlegung der Politischen Oekonomie, 3 te Aufl. Erster Halbband, S.79.)

然れども『苦痛なる役勞』は其意義明瞭を缺く虞なきや。自己の嗜好に投せざる業務に就くは苦痛ならんも、自己の嗜好に投せる業務に從事することは强ち苦痛を與ふると云ふこと能はざるべし。又、石炭の發掘、道路の掃除等の賤業に就ける者の役勞は苦痛なりと云ふを得んも、各種の技師、高級の官吏、教員、畫工、文士等の役勞は果して悉く苦痛なりと云ふことを得るや。又執務中多少の苦痛を感ずるも、其仕遂げたる事業に對し報酬の受納以外に多大の快樂を感ずることあり。殊に畫工、建築技師、文人等を以て然りとす。事業經營者の如きも、時としては、報酬の有無大小に不拘、寢食を忘れて其事務に鞅掌することあり。又俳優の如く名聲欲に驅られて報酬の如何を不顧自己の事業の成功に腐心するもの尠からざる也。

且つ苦痛なる勞役にても、從事中終始一貫苦痛を與ふるにあらず。ジェボンス氏も論せし如く、勞役の最初は其れに慣るゝ迄は多少の苦痛を感ずるも、暫時にして苦痛反つて快樂となり、其後快樂再び苦痛と變ずるを常とす。(註二)假りに或人の勞役時間を午前四時間、午後四時間とし、勞役に對する、一日間の苦樂表を左の如く作らしめよ。

午前八時―八時三十分	苦痛　半時間	
八時三十分―九時	苦痛快樂相殺	
九時―十時三十分	快樂	
十時三十分―十一時	快樂苦痛相殺	
十一時―十二時	苦痛　一時間	
正午―午後一時	休憩	
午後一時―一時十五分	苦痛　十五分間	
一時十五分―一時三十分	苦痛快樂相殺	
一時三十分―二時	快樂	
二時―二時三十分	快樂苦痛相殺	
二時三十分―五時	苦痛　二時三十分間	

右表中午後には役勞に慣るゝ迄の時間を十五分としたるは普通午後には午前程其の時間を要さゞるを以てなり。且つ午前の疲勞に因り午後は快樂少なくして苦痛多きは明かなれば快樂の時間を縮少したり

右表に據れば苦痛の時間は一日八時間の執務中僅に四時十五分間なり。勿論

右表は假設的のものにして、正確を主としたるものならざるを以て、之に適合する實例一もあらざらんなれど、所謂苦痛なる勞働にても多少の快樂の時間を含めるは事實也。因是、若し勞働を以て苦痛なる役勞とせば、普通、勞働と稱するものゝ一部は勞働に非ずと云はざるを得ざるに至らん。之を前例に徵せば八時間の役勞中、勞働と名づくべきものは僅に四時十五分卽ち五割强なり。要之、勞働は概して苦痛の役勞ならんも、悉く然るにあらざるを以て、苦痛を以て勞働の不可缺特徵とせば、一部の有償的役勞にして、普通、勞動と名くるものゝ一部を除外せざるべからざるに至らん。

次に『未來の利益の爲』なる語句は蛇足なり。現在と未來との區別は人の思惟せるが如く明白なるものに非ず。若し現在を以て今日を意味すとなし現在の利益の爲に役勞するものは勞働し居るに非ずとせんか、人力車夫の如く、其日暮しの生計を營む者は勞働者にあらずと云はざるを得ず。又現在を以て一瞬間とせんか、總べての勞役は皆未來の爲なり。且つ『利益』の爲め勞役となすは不必要なり。如何となれば、人の勞役するは必ず或る『利益』の爲なればなり。

マーシャル氏は又『勞働』を定義して曰く

We may define labour as any exertion of mind or body undergone partly or wholly with a view to some good other than the pleasure derived directly from the work. (Principles, 4 th ed., BK. II, Chap. III, sec. 2, P. 134.)

此定義はマーシャル氏自身の言へる如く、ジエボンス氏の定義に改訂を試みたるものなり。(註二)マ氏がジ氏の(painful)なる語を削りたるは吾人の意を得たるもの也。然れどもマ氏の Some good other than the pleasure derived directly from the work はジ氏の Some future good と何等の遜庭ありや。這は單に辭句の修正にして他に些の改善したる所を見ざる也。

以上の比較的複雜なる勞働の定義に反し、簡單なる定義を下すものなきにしも非ず。例へば、ニユーコーム氏曰く

In its widest economic sense labour is any exertion of the human faculties for the attainment of a definite object. (Principles of Economics, p.4 8.)

又パンタレヲニ氏曰く

Labour, in economics, means every painful human effort. (Pure Economics, p. 102.)

マクラウド氏曰く

"Labour" in economics means an exertion of the mind, however manifested, either by the hand, the tongue, or in any other way, (Principles of Economical Philosophy, vol. II, p. 100.)

此等の定義は辭句簡單明瞭なるも、普通吾人の勞働と認めざるものをも含有するの虞あり。例へば遊戯、運動等に要する役勞 (exertion, effort)は世俗勞働と看做さるるものなり。フヰリポビッチ氏は此論難を避けんが爲勞働を簡單に die auf äusseres Ziel gerichtete Tätigkeit des Menschen と定義したる後、語を次ぎて曰く

Eine Tätigkeit, welche nur auf die Erlangung inner Befriedigung gerichtet ist, bezeichnen wir nicht als Arbeit.

然れども、此定義は簡に失して闡明を缺くの虞あり。且つ吾人は總べての勞働の最後の目的は內界の欲望の滿足に在ることを忘却すべからず。

如斯屈指の經濟學者の與へたる勞働の定義に疑義多きを以て、吾人は本論に於て勞働を以て『間接に欲望を滿たすに用ゐる役勞』と定義し、下文に此定義の合理的

なるを證せんと欲す。

註一、シヨンベルヒ氏論じて曰く

Die häufig gemachte Unterscheidung der Arbeit in körperliche (mechanische) und geistige,—ist keine absolute, da jede, auch die geringste physische oder körperliche Arbeit eine geistige Thätigkeit erfordert und jede geistige Arbeit auch eine körperliche Kraftäusserung ist. ("Arbeit," Handwörterbuch der Staatswissenschaft.)

マクラウド氏も亦た曰く

However simple work may apparently be, it must be directed by thought. All labour is in reality thought, accompanied more or less by muscular exertion; and the sedentary scientific student, the lawyer, the clergyman, the author, the professor, the painter, the cabinet minister, the banker, the merchant, are as truly *labourers* and *working men* as any ploughmen, carpenters, or masons. (Principles of Economical Philosophy, vol. II, P. 100.)

註二、Jevons, Theory of Political Economy, Chap. V.

註三、Principles, 4 th ed., P. 134, note.

二 廣義の『勞働』

『勞働』の定義の何たるに拘はらず、經濟學者は殆んど一齊に所謂『生産』に用ゐる勞力のみを論じたり。例へば、マーシヤル氏曰く

Such labour with the head as does not tend directly or indirectly to promote material production, as for instance the work of the school boy at his tasks, is left out of account, so long as we are confining our attention to production in the ordinary sense of the term. (Principles, 4 th ed., p. 213, note.)

ボナー氏も亦た經濟學上『勞働』は財貨の獲得の爲めになす人の間斷なき役勞(Continuous human exertion for the procuring of wealth.)(註一)とせり。

イリー氏も曰く

……demand for labour is, in the last analysis, is a demand for the products of labour. (Outlines of Economics, rev. ed., chap. XXII.)

『消費財』及び『生産財』の産出、分配に直接使用する勞働、『消費財』の産出、分配に直接使用する勞働、より多からんなれど、若し吾人の研究する所を以て單に此直接的『生産勞働』とせば

他の間接に『生産』『交換』等に用ゆる勞働を全く經濟學の範圍の外に置かざるを得ず。然れども吾人は單に商船の船員の勞働を論じ、商船學校の教授の勞働を除外して可ならんや。海外に在りて貿易に從事するものゝ勞働を論じて、貿易の保護をなす陸海軍々人の勞働を無視して可なりとするを得るや。鑛山技師の勞働を研究して鑛業學校の教授の勞働を度外して可なるや。若し又此等の所謂『間接生産勞働』をも併せて研究するとせば、如何なる勞働を以て間接物生産勞働とし、如何なるものを以て間接生産勞働に非ずとするや。要するに、此二種の勞働の區別は到底明白に立て得るものに非ず。且つ所謂生産勞働以外に勤勞なるものあり。

此點に關しマクラウド氏曰く

All persons are *labourers* who earn Their bread by personal exertions, or services of any sort or description, from the Lord Chancellor to the lowest hodman. (Principles of Economical Philosophy, vol. II, p. 100.)

吾人も亦た所謂『生産』と『不生産』との間に、且つ『間接的生産勞働』と然らざるものとの間に區別を立つることの困難なる耳已ならず、間接直接に自己の勞役を以て生計を營むものを悉く勞働者と看做す方適當なりと信ずるを以て、本論には『勞働』を廣義に解することゝせり。

註1、Value of Labour in Relation to Economic Theory", Quarterly Journal of Economics, Jan., 1891, p. 137.)

三　役勞の分類

第一項に於て余は『勞働』を以て『間接に欲望を滿足する爲に用ゐる役勞』と定義したるが、本項に於て役勞の分類を試みんと欲す。

役勞の分類は其目的によりて種々方法あるべけれど、本論の立場よりして、左の簡單なる分類表を試作せり。

一、生理衛生的動作
- 生理
  - 飲食
  - 其他
  - 身
    - 洗面
    - 浴
    - 沐
  - 浄
  - 衣
  - 暖
- 衛生
  - 身
  - 着
  - 其他

二、筋肉的心理動作
- 注思
- 讀書
- 著作
- 發言
- 其他

三、心理的筋肉動作
- 身體の移動
  - 歩行
  - 疾走
- 手工
  - 熟練を要するもの
  - 熟練を要せざるもの
- 機械的
  - 道具の使用
  - 機械の使用
- 其他

生理衛生的動作は他の動作と同じく心理的なると同時に筋肉的なるも、其目的が他の動作の目的と大に性質を異にするを以て、右表には假りに他より分離して纏めて一部類とせり。他の生理上の動作例へば呼吸及び心臓の鼓動の如きは

自働作用なるを以て、役勞に非ず、從つて前表には之を掲げず。

第二種の役勞を筋肉的心理動作と名けたるは、注思、讀書、著作、發言等は概して筋力よりも心力を多く要するを以てなり。勿論、兩者の比例は各異れり。例へば概して注思よりも讀書に、讀書よりも著作に、著作よりも發言に多くの筋力を要するを常とす。是れに反して、第三種の役勞は心力よりも多く筋力を要するを以て、心理的筋肉動作と名けたり。然れども、此種の役勞中には筋肉的心理動作に劣らざる心理的作用を要するものあり。例へば、繪畫、彫刻、音樂等の如き技藝が心理的精力を要することは、時として、讀書、著作等よりも多くとも少からざることあり。唯技藝を心理的筋肉動作の部に入れたるは、此等の役勞は心理的精力を要すると同時に筋肉的熟練に依ること多きを以て也。

四　欲望と役勞

前項に於て人の役勞を分ちて、生理的動作、筋肉的心理動作、及び心理的筋肉的動作となしたるが、同一役勞にして自己の爲めになすものと他人の爲めになすものとの別あり。人は皆多少の欲望を有し、此欲望を滿たさんが爲、若干の役勞を要す。

人の欲望は文明の程度、個人の年齢、教育の有無、貧富、嗜好等に依り一ならずと雖も、今假りに我國の中流の獨身の紳士を標準とし其重なる欲望の分類を擧げん。

一、飲食欲
二、着衣欲
三、居住欲
四、衞生欲（暖身欲、淨身欲）
五、讀書、交際、通信欲
六、娯樂欲

此等の欲望を滿足せしめんが爲には物質と役勞とを要するものなるが、兩者の比例各異なれり。今其比例の大小に依り、欲望を更に左の三種に區別することを得べし。

第一、主として物質のみを要するもの
第二、主として役勞のみを要するもの
第三、物質併に役勞を比較的等分に要するもの

繪畫骨董品、彫刻等の愛玩欲は第一種に屬す。如何となれば、繪畫、骨董品等は購入備付、保存、掃除等に關し多少の役勞を要すれども、此種の欲望の充足に必要なるものは繪畫、骨董品等の財貨にして、其れに要する役勞は左程緊要ならず。之に反して淨身欲、圍碁欲等は第二種に屬す。淨身には清水若しくは湯併に手拭を要し圍碁には碁盤、碁石を要するも、其れに缺くべからざる役勞に比すべくも非ず。第一種と第二種の相異は之を繪畫の愛玩欲と圍碁欲との比較に徵すれば明かなり。繪畫は之を壁上に懸けるのみにて其れに對する欲望を滿足せしむることを得るも、碁盤、碁石を床の間に飾りて圍碁欲を滿たすを得ず。其欲望を滿たさんが爲には碁盤及び碁石を所有するの要あるのみならず、敵手を拉し來りて三十分乃至數時間に亘る心身の努力を要す。

又讀書欲、暖室欲の如きは第三種に屬す。讀書欲を充足せしめんが爲には書物と讀書の役勞を要す。讀書欲を有し、未讀の書物を藏し居るも、讀書の役勞に堪へざる爲其書物を死藏するもの尠なからず。暖室も亦た、暖爐、燃料を要すると同時に點火、暖爐の掃除、燃料の運搬等に多大の役勞を要す。飲食欲、着衣欲の如きは材

料の性質に依り役勞の大小を異にす。既に料理されたる食物、飲料は之を消費するに僅少の役勞を要するのみなるが、若し其材料卽ち白米、野菜、鮮魚等の供給を受けたる時は、之を料理して膳に上せ食欲を滿たし得るに至る迄には多大の役勞を用ゐざるべからざる也。

要之、各種の欲望の滿足には必ず多少の役勞を要し、且つ少數の例外を除けば、多少の物質を要す。自己の欲望を充足せしめん爲、役勞、物質を自給するものは所謂自足經濟を營む者なり。然れども文明社會にては役勞、物質を交換して各自の欲望の充足を增加せんとなすを常とす。卽ち所謂社會經濟組織中に住める者は大略左の方法を用ゐて、自己の欲望を滿たさんと努むるを以て常とす。

第一、役勞と役勞との交換　例、大工が醫師の藥局を修繕したる代償として醫師が大工又は其家族の病床に臨診するが如し

第二、役勞と財貨との交換　例、給料、賃銀を得て他に勤勞を給付するが如し

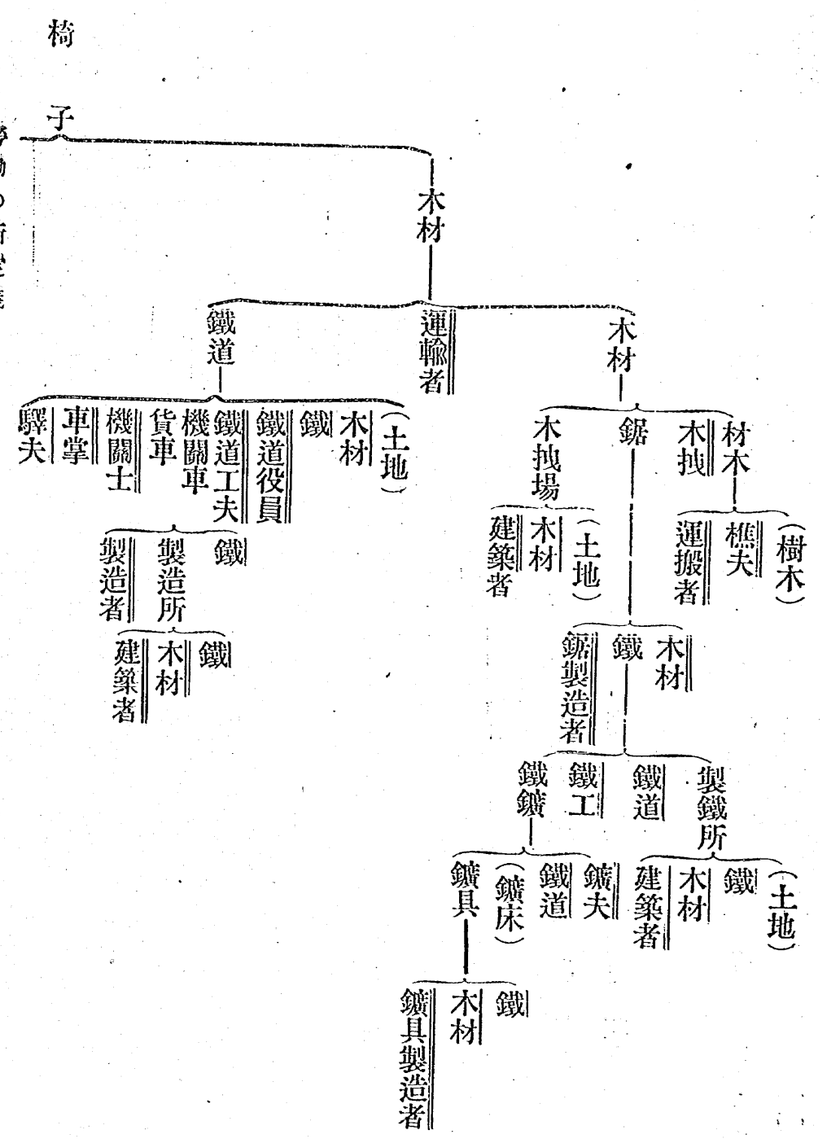
第三、財貨と財貨との交換　例、物々交換、賣買皆是れに屬す

第四、財貨と財貨の使用權との交換　例、土地、家屋、車馬等の賃貸借

如斯、社會經濟組織中に生活するものは一部の欲望を自己の役勞に依りて滿たせども、他の多くの欲望は自己の役勞若しくは財貨又は役勞と財貨の兩者を提供して、他の役勞若しくは財貨、又は役勞及財貨の兩者と交換して以て之を滿たすを常とす。故に貧困にして何等の蓄財なき者は自己の役勞を以て他の役勞及び財貨と交換して生計を營むべく、又、之に反して、富める者卽ち多くの蓄財を有する者は主として自己の財貨を提供して以て他の役勞及び財貨と交換して其れが欲望を充足せしめんとす。因是、社會の一部の人、卽ち蓄財全くなきか又は少なき者は日々他人の消費すべき財貨の產出運送、配達等に從事なすか、若しくは官公吏、敎員、醫師、婢僕、となりて他人の種々なる欲望を滿たし、以て其れより得る所の報酬にて自己の要求する財貨若しくは役勞の供給を他人より受くるなり。反之、他の蓄財多き者は自己の財貨を提供して、自己の要求する財貨及役勞を獲得することを得るを以て、自ら財貨の產出、運搬等に從事し、または他に自己の役勞を提供する者尠し。

さはれ、何者が多くの蓄財を有するにもせよ、又何者が如何なる欲望を有し、何者が如何程の役勞に堪ゆるかを不問、一社會經濟組織中には、一方には略一定の欲望の總額ありて、又一方には略一定の役勞の提供あり。且つ一方には若干の蓄財あり。此役勞と此蓄財とを以て欲望を充足せしむるなり。然れども、若し一方にて現存の財貨を消費すると同時に一方にては消費せる財貨を補塡するに非ずんば、幾何ならずして、何等の蓄財なきに至らん。かるが故に多少先見の明を有する男女の組織せる社會は出來得る限り時々刻々消費しつゝある財貨を補塡することを努むるのみならず、反つて蓄財を增加せんとなすを常とす。

されど、財貨を補塡するには新に財貨を拾集、發掘、培養、製造せざるべからず。之を拾集、發掘、培養、製造なすには必ず人の役勞に俟たざるべからず。今假りに一脚の木製椅子を取りて、其れを完成する迄の略歷を左に揭げん。



- 椅子製造者
  - 椅子製造所
    - （土地）
    - 木材
    - 鐵
    - 建築者
  - 木材
  - 鐵
  - 製造具製造者
    - 製造具製造所
      - （土地）
      - 木材
      - 鐵
      - 機械
        - 木材
        - 鐵
      - 製造者
      - 機械製造者

備考、右表中役勞の提供者には右側に複線を附し、同一物件にして既に一回其要素を略載したるものは右側に單線を施し、自然物には括弧（）を附けたり。

前表に示すが如く、一脚の椅子の製造には根本的に、人の役勞と自然物との外には何物をも要さゞる也。若し同一方法を以て他の製造品若しくは農產物、鑛物其

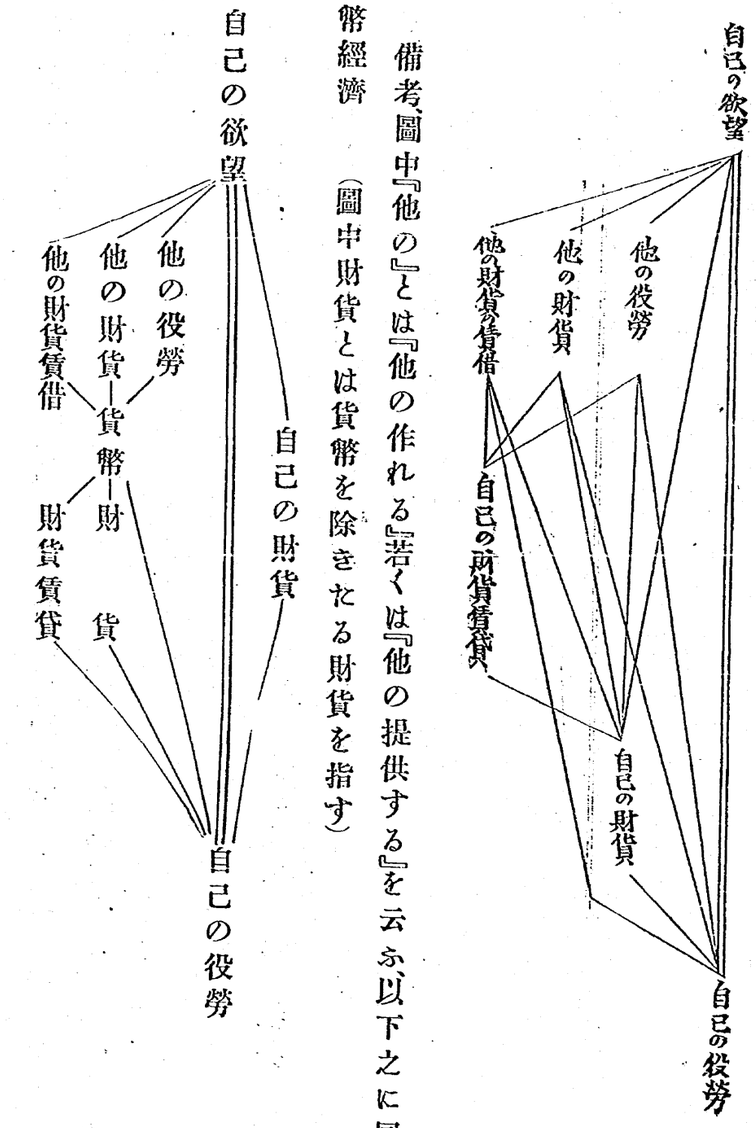
外何品をも問はず、是れが歷史を逆溯せんか、前表に類似せる結果を生ずべし。

されば勞働と云ひ財貨と謂ふも、是れ等しく人の役勞其物にあらざれば、其結果なり。而して人は皆或種の欲望を有し、其欲望を滿たさんが爲、財貨の蓄積なき者は、自己の役勞を用ゐて直接に自己の要求する財貨を製出なすか、或は他人の要求する財貨を製出して、之を自己の欲する財貨と交換なすか、又は自己の役勞を提出して賃銀を得たる後、己の要求する財貨若しくは役勞を入手するものなるは曩に論ぜし如くなるが、今左に是れが圖解を試みん。

自足經濟

- 自己の欲望
- 財貨
- 自己の役勞

物々交換社會經濟

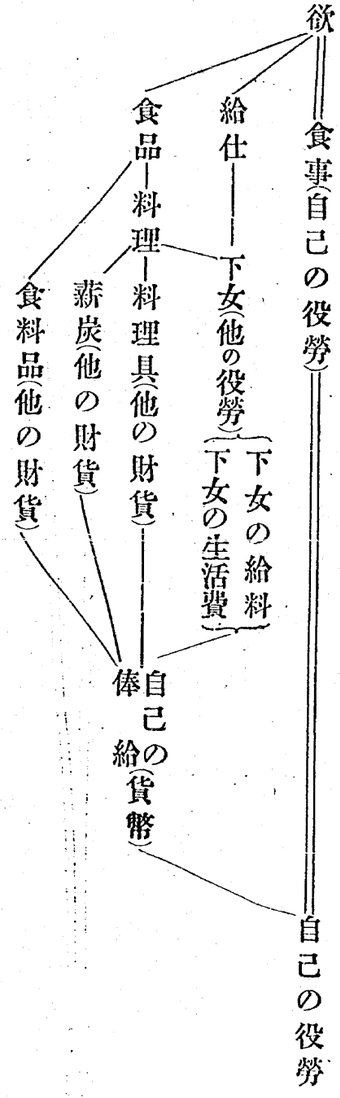


備考、圖中『他の』とは『他の作れる』若くは『他の提供する』を云ふ以下之に同じ。

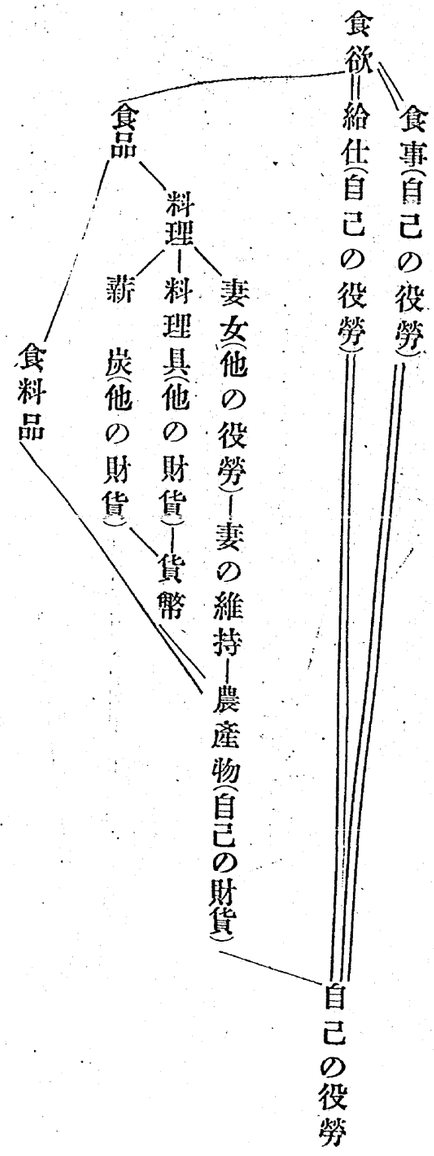
貨幣經濟　（圖中財貨とは貨幣を除きたる財貨を指す）

前圖の意義を一層闡明になさんが爲、欲望の一なる食欲を取りて、中流社會の獨身の紳士と、其日暮しの有妻農夫とを標準となし、左に役勞と欲望との關係の圖解を試みん。

中流の獨身紳士

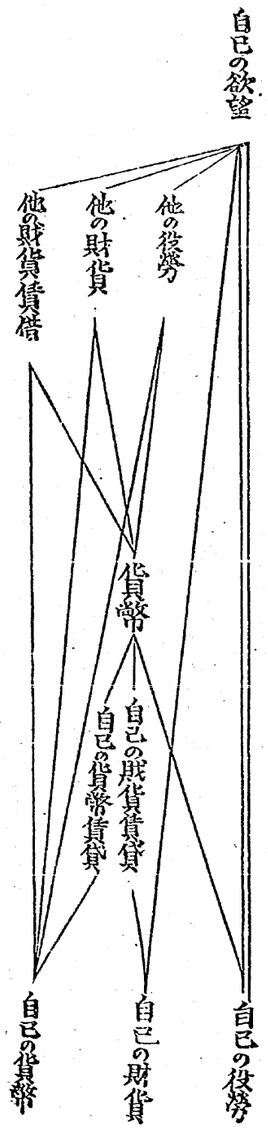


其日暮しの有妻の農夫

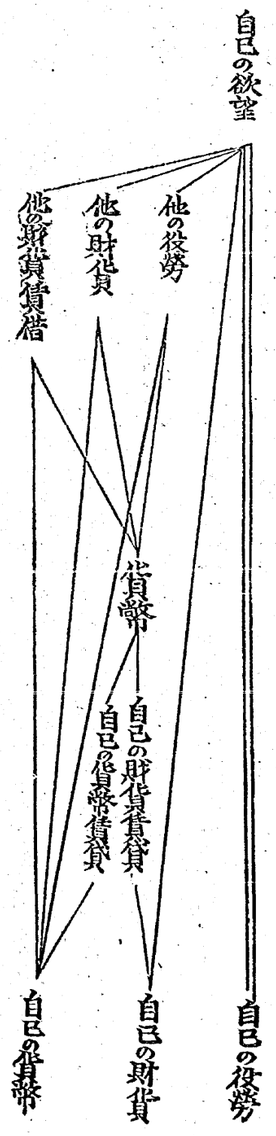


前數圖は何等の蓄財なきものが、自己の役勞を用ゐて、間接に直接に自己の欲望を滿たす順序を示したるが、次に蓄財を有する者が、如何にして、自己の欲望を滿たすやを圖解せん。

甲、役勞を用ゐて收入の增加を計る者



乙、所謂居喰をなす者



甲は自己の所有する財貨及び貨幣を賃貸なし、其れより生ずる賃貸料を以て自己の要求する他人の役勞、財貨と交換するか、又は財貨を賣却して其代金を以て必要品を求むるか、或は貨幣を用ゐて直に自己の欲望を滿足せしむる爲に要する物を購入すると同時に、自己の役勞を以て、其收入を增加し、從つて、消費し得る又は貯蓄し得る財貨、貨幣を增加す。反之、乙の收入は自己所有の財貨、貨幣のみより生ず、自己の役勞は之を悉く直接に、自己の欲望の充足に使用せり。

要之、人の欲望は自己の役勞を以て直に之を滿たすもの(前圖中複線を以て接續せるもの)と自己の役勞を以て他の役勞、財貨と交換して以て間接に之を充足せしむるもの(前圖中單線を以て接續せるもの)あると同時に、自己所有の財貨、貨幣を用ゐて之を滿たすものとあり。されど、前述せる如く、財貨と云ひ貨幣と云ふも皆是れ自己若しくは他の役勞に依りて自然物の力を藉りて造り出だされたるものなるを以て、人の欲望の充足は一として自然と人の役勞に俟たざるものなし。ワグネル氏も曰く

Für die Menschenheit, diese als ein Ganzes betrachtet, ist gegenüber der constanten Beschaffenheit der äusseren Natur und den dadurch bedingten Beziehungen zwischen menschlicher Bedürfnissbefriedigung und dieser Natur die Arbeit die unbedingte Voraussetzung zur Beschaffung und Vermendung von Gütern inbesondere auch äusseren Gutern, und damit zur Erzielung der Möglichkeit der Befriedigung der Bedürfnisse: die "Verbindungsbrücke zwischen Bedurfniss und Befriedung" (Grundlegung der Politischen Oekonomie, 3 aufl., Erster Hlb.. S. 79.)

五 結論

前數項に於て吾人は先づ『勞働』を『間接に欲望を滿たすに用ゐる役勞』と定義し次に役勞の分類を試み、進んで役勞と欲望との關係を論ずるに及んで、欲望の充足には

財貨と
役勞

とを要することを述べたり。普通、經濟學者は欲望の充足を論ずるに當りて、單に財貨の必要を云々すれど、そは謬見に非ざるや。例へば、着衣欲には

衣服と

着衣上必要なる役勞

とを要さゞるや。衣服あれども、左右の兩手、用をなさゞるか、又は之を使用することを欲せざれば、自ら着衣欲を滿たすことを得ざるに非ざるや。小兒、老人は他の役勞を用ゐて着衣をなし、壯年者と云へども、其れが爲婢僕を雇ひ得る者は之を使役して、着衣に助力せしむるもの多からずや。

而して、嬰兒、疾病者を除くの外、人は皆多少の役勞に堪へ、且つ又多少の役勞をなしつゝあるものなるが、役勞の用途に左の三種あり。

一、直接に自己の欲望を滿たすもの

例へば、食事、着衣、運働の如し

二、自己の要求する財貨を直接に獲得するに用ゆるもの

例へば、自己の消費する食料品を培養し、自己着用の絹布の爲に養蠶なすが如き

三、自己の役勞を以て他と役勞若しくは他財貨と交換するもの

即ち(一)は前項圖中複線を以て示せるもの、(二)及び(三)は單線を以て表はせるもの

なり。第一種の役勞は習慣上且つ經濟學上『勞働』(labour, travail, Arbeit)と名けざるものにして、第二種幷に第三種の役勞は習慣上且つ經濟學上『勞働』と稱するを常とす。而して第二種の場合には役勞を以て自己の使用する財貨を獲得し直ちに之を消費するに反し、第三の場合には自己の役勞を以て、或は財貨を製出し、或は之を他に提供して然る後自己の消費すべき財貨を獲得するものなれば、第二種と第三種との間には自己の欲望と自己の役勞との關係に密粗の差はあれど、第一種の直接關係に對しては兩者共間接關係なり。因是、余は第二種及び第三種の役勞を以て『勞働』と名けんと欲す。

本論に與へたる『勞働』の定義即ち『間接に欲望を滿たす爲に用ゐる役勞』は簡單にして習慣に適合し、且つ在來の種々の『勞働』の定義と衝突する所なきのみならず、此等の定義に對する疑義を除去し得るものなるを信ずる也。